

第 20 回 金木犀の香り

今年の夏は日照時間が異常に短く、真夏の季節を過ごしたという印象が薄い。いつの間にか夏が過ぎ、あっという間に涼風の立つ季節になってしまった。去年は夏の終わり頃、庭の手入れを怠ったせいもあるが、庭には雑草があちこちに生い茂り、夜にはコオロギやキリギリスなどの鳴声がよく聞かれ、雨の日などには蛙の鳴き声も聞こえたような気さえたものである。実際十数年前には庭にひとつがいのヒキガエルが棲み着いていたが、やがて一匹だけになり、そのうちにいつの間にかいなくなってしまう。今年は 8 月中旬に植木職人が入り、丁寧すぎるほどの剪定をしたため、仕上がりがひどくすっきりした景色になってしまい、そのためか秋になっても庭からは虫の声があまり聞こえなくなってしまう。かろうじて晩夏の頃虫好きの小学 3 年生の孫が置いていった虫籠のコオロギの鳴き声を結構長い間楽しめたが、肝臓の庭には秋の虫が育たなかったのである。

そんな狭い庭でもひときわ目立つのが金木犀で、例年開花時期の関係で花が散った後に剪定することになっている。金木犀は中国原産の雌雄異株の常緑樹で、日本にあるのはほとんどが取り木で繁殖させた雄の木である。育って大きくなっても高々 5m~6m にしかならないということであるが、拙宅の庭の金木犀は二階ベランダの手すりの高さまで達しており、丸く隆起していて小山のように見える。秋になると対生した葉のある小枝の上部に橙黄色の四枚の花弁と二本の雄蕊をもつ花が密集して咲き、まわりに強い芳香が漂って、ある時期唐突に開花したように感じるほどである。去年の手帳をみると、9 月 23 日と開花時期が例年よりも早く、花も咲き乱れるという感じで、咲き終わったあとは木のまわりのあちこちにオレンジ色の花びらの分厚い吹き溜まり模様が出来るほどであった。また、去年の夏は金木犀の木の枝にスズメバチが大きな巣を造り、業者に依頼して取り除いた記憶がある。一方今年の開花は 10 月 1 日とほぼ例年並みであったが、枝につけた花の数は極端に少なかった。金木犀のみは花の時期のあと、例年冬に備えて松の木に雪釣りをする 12 月頃に剪定しているが、今年の花の咲き具合が悪いのは、去年全体を縮めるように大きく刈り込んだためと夏の異常な日照不足などに起因している。

開花期の金木犀は好き嫌いはあるが、甘い香りが強く、かつて女の子の孫が散った花びらを集めて香りの瓶詰めを作ったことがあった。彼女のお気に入りの香りを保存することができなかったのはいうまでもない。その香りの成分はガンマデカラクトンというホソヒラタアブ以外の虫を寄せ付けない特性をもつラクトン類の一種である。金木犀の香水の人気は高いということである。香水に関して、モモやチェリーやアプリコットなどの匂いの成分がベンズアルデヒドやオイゲノールとよばれるエステル類であり、香水成分の中心となるものがフローラル系とよ

ばれるローズ、ミューゲ、ジャスミン、リラなどであることを筆者が知ったのは最近のことである。現在は香水の大衆化に伴って合成素材も天然素材と同様に多数の種類から作られており、それらを組み合わせることによって、それぞれの好みにあったものが創作されている。

筆者の住まいのあるこの地域には金木犀がとくに多く、それらが一斉に開花するため、文字通り金木犀の街と化してしまうのである。それはまた、行く秋をしみじみ感じさせる香りでもある。